

本番組については、全容を把握できる資料が十分に揃っていないため、現時点では断片的な情報のみの記載となることを、あらかじめご承知おきいただきたい。

本番組の特徴は、以下の読売新聞東京版朝刊に掲載された番組紹介記事及び日本テレビ演出部の回答が端的に示していると言えよう。

とりあげる曲目はすべて、ひと昔前に流行したもので、歌謡曲のほか、軍歌、寮歌、童謡なども紹介する。

出演するベテラン歌手は、当時のままで歌い、若手は現代風にアレンジしてうたう。(昭和40年7月13日付読売新聞東京版朝刊)

この番組みでは日本人の心をうたった歌を文化遺産として父から子へ、子から孫へと伝えていきたいと願っているからです。人の心をうつ歌は時代を越えて生き続けるはずです。(「放送塔」欄に掲載された視聴者投書に対する日本テレビ演出部の回答、昭和41年4月11日付読売新聞東京版朝刊)

昭和53年発行の日本テレビ社史『大衆とともに25年<沿革史>』には、第16回及び第43回が放送された週の番組表が掲載されているが、いずれも読売TVホールで収録されたことが記載されている。ただし、放送を確認できた地域は関東広域圏のみであり、読売テレビのある近畿広域圏や、中京広域圏、福岡県、北海道での放送事実は確認できなかった。

番組への反響については、前掲の昭和41年4月11日付読売新聞東京版朝刊に掲載された日本テレビ演出部の回答より、年配の視聴者から多くの意見が寄せられていたことがうかがえる。一方で、読売新聞東京版には10代の学生からの投書も複数掲載されており(放送記録の第34回・第37回・第38回を参照)、本番組が必ずしも年配層のみに受容されていたわけではないことも確認できる。ただし、平日昼間に就労していた男性層からの反応は、少なくとも確認できた投書欄からは見えにくい。これは、番組の放送日時が火曜日の昼の時間帯であり、視聴可能な層が限定されていたことが影響していたと考えられる。